

## 特攻隊Ⅳ

特攻隊の話をしだすと、特攻で国や家族のために散華した1万数千人の若者の数だけ物語がある。とても小生のようなあちこちに興味を示すような（たとえば宇宙論とか量子論とか一般科学とか数学とか）人間には、追いつかない。そのことに専念している方でさえ、一生かけて調べ上げている。

先日、たまたま繊維関係の家に生まれ、特攻を志し、戦友だけが先に出撃し、自らは生き残ってしまった方が、鎮魂のため、最近までまったく知られなかった万世（バンセイ）飛行場が陸軍特攻隊の出撃の場だったことを語り続け、私財を投げだして記念館を建立した話を読んだ。苗村七郎さんである。・・・知覧は特攻基地で有名で、「特攻の母」鳥濱トメさんがよく知られている。しかし観光地になってしまっている。

沖縄のひめゆりの塔も観光地になってしまった。そのため、白梅（シラウメ）の塔は、逆に知る人もなく、ボクはたまたまよく知るタクシーの運転手に連れて行ってもらったのだが、静謐で往時を思わせるようなものはなかったと思う。ただ鎮魂の場だった。青山繁晴さんが最近、著書に書かれておられるが、県立第二高女の全滅地域で、沖縄の方も知らない人がたくさんいる、という。・・・沖縄戦の悲劇は、日本軍の失敗のひとつである。島民を安全なところに逃がすつもりが、米軍がどこから上陸してくるかわからなかったため、遅れて巻き込んでしまったのである。もし、沖縄を捨てるつもりであったなら、全国都道府県の慰霊碑が建つことはなかったし、対馬丸の悲劇もなかっただろうし、戦艦大和も出撃することはなかった。対馬丸は、米軍の魚雷だろう、という説と自爆だという説もある。

小生の子供たちがまだ小学生の頃、ひめゆりの塔を訪ねたが、わずかな生き残りの女性が子供の肩を抱いて説明してくださったが、理解できただろうか？・・・彼女らももう亡くなられたかもしれない。

九州南部の飛行場で、特攻の基地になったところは、つねに「特攻の母」が周辺にいて、ずいぶん親切に特攻兵を大事にしてくれたという。

万世空港では、飛龍館の山下ソヨさんもそうである。(後述)

話を特攻に戻す。これを考え、指揮をとったのは大西瀧治郎中将とされているが、実際にはそれ以前から上層部に具申していた人は多い。

さらに、神風隊のように組織だって特攻がおこなわれてしまったのは、最初のレイテ戦での戦果が、敵もまさかと思っていたから、極めて大きかった。そのため、軍令部では、「決して命令はしてくれるな」という考えだったのに、ほかに手の打ちようがなく、結局は、志願者といいながら事実上命令になってしまった面もある。それでも、美濃部正や岡島清熊のように頑として特攻兵を出さなかった部隊もある。源田実など、戦後自衛隊の設立から参議院議員にまでなったが、ついに自らの関与を認めなかった。知らなかったはずはないのだが。

2001.9.11 で世界貿易センターが 2 機の飛行機に衝突され、新聞などでカミカゼ・アタックといわれたため、朝日新聞などは、「特攻はテロだ」ということになってしまったが、東京裁判でも問題にならず、まったく異なることが理解できない連中だ。話せば長くなるから、ここでは書かないが、つまりは攻撃の対象が特攻は「敵艦船」「空母」であり、通常の戦闘行為であるのに対し(1分間に1万発の高射砲などの反撃がある)、テロの目標は無辜の民、通常的生活をしている人々であり、予期せぬ災難にも似たものである。だから反撃しようもない。

当然ながら戦果は、味方には大きく、敵は過小評価する。多分、今でいうところの PTSD があつたはずで、特攻機を見ただけで発狂した米兵もいる。ずっとのちにベトナム戦争での PTSD が問題になっているが、特攻でも同じだったに違いない。そういう表現がなかっただけである。

高木俊朗という報道員は、「特攻基地知覧」の後書きで、「戦後、反戦の目的でつくられた戦史があり、その反動として体制側の戦史が書かれつつある。旧職業運人による体制側の資料に従って反動の歴史は書き換えられることを恐れる。高木が憎むのは、若者を追い込み、戦後も特攻を美化しようという元軍上層部たちの勢力である。特攻隊の悲惨と虚しさを明らかにすることが高木らの目的であって、兵士とその遺族を批判するものではない。」

別の少尉がいう、沖縄特攻における参謀本部や第六航空軍の特攻編成

には、少佐以上の上級操縦者であり、上級将校である者が全く存在しなかったことが、はっきりとわかる。すなわち、陸士出身者は5名の大尉の他は57期の初級操縦者が主体であった。

これが一億総特攻の実態である。当時、いかに掛け声だけで、実体は下級者を死に至らしめ、上級者は下級者を踏み台にしていたかがお判りと思う。

特攻兵は強制されたのだ、あるいは狂っていたのだなどと戦後の識者と呼ばれた人々は言うが、では、彼らは戦中、戦前には何をしていたのか？

たとえば、元知覧高等女学校の生徒から、「特攻隊員たちは、日本の平和を願いながら出撃していきました」と聞かされた苗村は、「それは作り話だ」と断言している。(戦後になってから、作ってしまった話である。)

特攻と言えば知覧、というすりこみがあるのだが、ほとんどの遺族は知覧から飛び立ったものと思いついでいた。知覧には年間50万人が訪れるが、万世には1.5万人くらいしか来ない。まさに「鎮魂の記念館」であり、苗村が、「観光地やない」と言った言葉通りである。観光バスの順路にもいれない。要は、先に逝った戦友たちの慰霊のためである。

子犬を抱いた少年兵の写真が知覧には飾られているが、これは実は万世空港から飛び立った少年兵である。見るからに明朗な少年であるが、数多くの逸話を遺して出撃した。17歳だった。子犬を抱いた写真を遺し、翌日特攻に出撃した。

兵士たちは「飛龍館」に寝泊まりしていたが、ここにも特攻隊出撃の場には、多くの「特攻の母」と呼ばれる女性たちがいた。飛龍館の山下ソヨもその一人である。彼女の話によると、毎日10機から20機の陸軍特攻機が沖縄に向かって出撃していた。

彼女は、婦人会の女性たちと出撃用のおにぎりを作った。その炊事場に、出撃前の青年が現れて声をかけた。倉田道次という少尉だった。「そのおにぎりを食べる時間には俺たちは死んでいるよ。だから、作らなくてもいいよ。残った人たちに食べさせてあげてください。」

その瞬間に、女たちの瞳からぼろぼろと涙が零れ落ちた。彼らは出撃後2~3時間で沖縄の敵艦に突入するのだ。拭っても拭っても涙が湧き出てきた。「これが最後の歌だ」。倉田少尉は大声で別れの歌を叫んだ。

昂る気持ちを抑えているのが痛々しかった。婦人たちは泣きながらおにぎりを作り続けた。

「その涙がぽとぽとご飯に落ちました。倉田さんは、『塩はいらないね』と笑うんです。その冗談も悲しみの中に消えていってしまいました。」

ソヨは苗村に言った。軍から検閲されることを避けるために、彼女に家族宛ての手紙を託した隊員もいる。

・・・彼女はおだやかな人で声を荒げることがなかった。だが、親族によると、一度だけ、血相を変えたことがあるという。特攻前夜、前任将校が玄関先で特攻隊員の頬を張ったのを見たときのことだ。たるんでいる、というのだった。彼女は、隊員から見えないところで、上官に訴えた。「なんてことすつとね！あん人たちは、明日仏さまにないやつとごわんど！」

小生、特攻隊員の遺書は読むのがつらい。万世飛行場から出撃した勇士たちのほとんどが 20 歳になるやならずである。

その中に、娘に向けて〈父恋しと思はば空を視よ〉と書き残し、ひときわ光彩を放つ遺書がある。身重の妻と子供を遺して散った第 64 振武隊隊長の渋谷健一大尉のものだった。彼は加藤隼戦闘隊出身で 31 歳。中国戦線で戦った後、内地に帰還して万世で教官も務めていた。搭乗時間も 3000 時間を超える練達のパイロットで、「なぜお前のような優秀な者がここに来たんだ」と同僚が漏らした。

〈愛するわが子へ〉

〈倫子並生まれ来る愛子（マナゴ）へ〉

父は選ばれて攻撃隊長と成り、隊員 11 名年齢僅か 20 歳に足らぬ若櫻とともに決戦の先駆と成る。死せず共戦に勝つ術あらんと考ふるは常人の浅墓なる思慮にして必ず死すと定まりて、それにて敵に全軍総当たりを行ひて尚且現戦局の勝敗は神のみ知り給ふ。真に国難と謂ふ可なり。

〈父は死にても死するにあらず、悠久の大義に生まるなり〉

そして寂しがりやの子になってはいけない。お前には母がいるではないか、と娘を励ましている。渋谷は両親を早くに亡くして生き抜いたのだった。

〈父も又幼少に父母病に亡くなれど決して明るさを失はずに成長したり。まして戦に出て壮烈に死せりと聞かせば、日の本の子は喜ぶべきものなり。

父恋しと思はば空を視よ。大空に浮ぶ白雲に乗りて父は常に微笑みて迎ふ。〉

渋谷は、絶望的な空気の中で、倫子の写真を胸に納め、「子供に不幸のようだが、必ずわかってくれるだろう」と言い残したという。未練を断つかのように、バンバンと足踏みし、白鞘の短刀を握って愛機に乗り込んで行った。

特攻で散華したその日、妻は長男を産み落とした。健一の生まれ変わり信じ、子供は健男と名付けられた。

その後悪天候や飛行機がなくなったりして渋谷大尉の部隊が万世から最後の特攻になった。

特攻という表現はなかったが、たとえば坂井三郎は、硫黄島で、敵を見つけて撃墜するまで帰ってくるな。相討ちでもいい、と、事実上の特攻指令である。大西中将赴任の4か月前である。

しかしもっと以前にも燃料が切れたり、被弾したりして帰還できなくなったとき、敵艦に体当たりした勇士が多数いる。

たとえば、昭和17年5月8日の珊瑚海海戦で、索敵に出撃し、敵を発見し、燃料が少なくなったため帰還すると打電した菅野兼蔵は、攻撃隊が敵を見つけることができなかったときのことを考え、「菅野機帰還を中止、われ誘導す」と打電し、機首を反転させ、攻撃隊の戦闘に立ち、敵上空まで攻撃機を誘導し、敵攻撃隊の真ただ中に飛び込んで被弾し、はるか真下の敵艦めがけて突進し、敵艦艦橋に轟音をたてて体当たりした。

翔鶴戦闘機隊の宮沢武男一飛曹も、翔鶴を攻撃する敵機に体当たりして翔鶴の危急を救った。

石塚重男一飛曹も米油槽船ネオショーに急降下、1500メートルで被弾したが、そのまま爆弾を命中させ、さらに火だるまになりながら、ネオショーの艦橋に体当たりした。

昭和18年10月19日、マリワナ沖開戦初期に空母大鳳から艦爆に搭

乗した飛曹長の小松咲雄は、魚雷に気付き、この魚雷に向かって体当たりを執行し、大鳳を救った。……（朝日は、これもテロと呼ぶか！）

有馬正文少将は、昭和 19 年 10 月 15 日に台湾沖空戦で「特攻戦法の他に道なし」の持論に従って、自ら敵空母に特別攻撃をかけた。大西長官が赴任したのは、10 月 19 日である。

その後、栗田艦隊のレイテ湾突入を援護しようとしたが、彼らは怖気づいて帰還してしまった。……この時点で、日本軍の敗北が決定的になる。信じられない臆病さであるが、あとは玉砕戦のようになる。

米軍にも同じことを実行した者も当然ながらいる。山本五十六大将機を撃墜した P38 の乗員たちは、「いかなる」犠牲をはらってでも撃ち落せ、との命令をうけたが、当然「体当たり」も視野にはいつている。ミッドウェイ海戦でも、陸攻に搭乗し、われわれが撃墜された後、戦闘機隊に向かって「敵を討ってくれ！」と言い残し、のちに「運命の 5 分間」と呼ばれる状況を遺した。このため、なけなしの空母がほぼ全滅し、絶対に負けるはずのなかったミッドウェイの惨敗に終わった。南雲忠一や源田実の判断ミスというより、間が抜けた作戦変更のためである。

レイテ沖海戦で、「組織だって」特攻が行われるに至るのだが、敵将ハルゼーが震え上がったという。

最初の、と言われる関行男海軍大尉の出撃にラバウルの魔王、西澤廣幸が援護したのだが、帰還してきた西澤のすさまじい雰囲気、だれも声をかけられなかったという。

**世界はこれらのことをどのように見ているか？「きわめて確実かつ有効な攻撃法である」というのが大方の見方である。個々にはあげないが、否定するひとはまったくいない。**

念のため、特攻機は、片道の燃料しか入っていなかった、とか、戦艦大和も片道の燃料しか入れていなかった、などとわざと誤解している人がいるらしいのだが、まったく見当違いの話で、みな満タンにして出撃している。

大西が「こりゃあね、統率の外道だよ」と参謀の猪口力平につぶやいたのが巷間に広まってしまっている。しかしブラジル海軍の人も同じことを言っている。「将兵の士気を特攻まで高めた、日本軍の統率力に感銘した」からに違いない。

いつの時代でも、どこの国であれ、国難に直面した際には、祖国のためにいつでも死ぬ覚悟と勇気をもった人間が現れてきたからこそ、その国は守られてきた。

スターリン主義者やナチス黨員にせよ、結局は権力を手にいれるためのものであるが、特攻隊員には、権勢欲や名誉欲はなかった。祖国を憂える尊い熱情があるだけだった。代償を求めない純粋な行為にこそ真の偉大さが存在する。

大西長官の発言をいくつか。

ある日、副官に向かって、「棺を蓋うて事定まる、とか百年ののちに知己を得る、というのが、俺のやったことは、棺を蓋うても事定まらず、百年ののちにも知己を得ないかも知れない。」これはつらい、あるいはさびしいということだよ。

草柳大蔵が書いた「特攻の思想」には、新聞記者が大西中将にインタビューする場面がでてくるが、「神風まで出して、はたして敗戦を挽回できるかどうか」との質問に、落ち着いた口調で以下のように答えている。

「会津藩が敗れたとき、白虎隊が出たではないか。一つの藩が最期でもそうだ。いまや日本が滅びるかどうかの瀬戸際にきている。この戦争は勝てぬかも知れぬ。」……「それなら、なおさら特攻を出すのは疑問でしょう。」

「まあ待て、ここで青年が起たなければ、日本は滅びますよ。しかし、青年たちが困難に殉じていかに戦ったかという歴史を記憶する限り、日本と日本人は滅びないのですよ。」

「勝たないまでも負けない。それが日本を亡国から救う道である。そ

のためには特攻が必要なのだ。国民全部が特攻精神を発揮すれば、たとえ負けたとしても、日本は亡びない。そういうことなのだ。」

特攻は統率の外道だが、「しかし、特攻により、敵を追い落とすことができれば、七分三分の講和ができる。そのためには、フィリピンを最後の戦場にしなければならない。しかい、これは九分九厘、成功の見込みはない。ではなぜ見込みがないのに、このような強行、愚行をするのか？

ここに信じてよいことがある。いかなる形の講和になろうとも、日本民族がまさに滅びんとするときに当たって、身をもって防いだという若者達がいたという歴史が残る限り、500年後、1000年後の世に、必ずや日本民族は再興するであろう。」

多少の論理の飛躍がありそうだが、語っていることは、納得できるだろう。

たとえば、日本刀を持って突撃するのも、敵弾が乱れ飛ぶ中で攻撃するのも特攻のようなものである。ペリリューでも硫黄島でも、日本兵よりも米兵の方に被害が大きかった。

ただ、大西中将の、介錯なしの切腹で、すべての特攻隊員が納得するだろうか。「永遠のゼロ」では、「老人ひとりの命ですべてが許されるものではない」という話がある。特攻を命令した連中も兵に対し殉ずるべきだった、と思う。

むしろ、牟田口廉也や服部卓志郎、辻政信のように、兵士を将棋の駒のように「遊び」感覚で使い捨てにしてきた連中が生き残って言い訳ばかりしているのも情けない。

大西瀧治郎中将の遺書

特攻隊の英霊に日す  
善く闘ひたり深謝す  
最後の勝利を信じつつ  
肉弾として散華せり  
然れども其の新年は遂に  
達成し得ざるに至れり  
吾死を以って旧部下の英霊と  
其の遺族に謝せんとす  
次に一般青壮年に告ぐ  
我が死にして軽挙は利敵行為なると思ひ  
聖旨に副ひ奉り自重忍苦するの  
誠めともならば幸なり  
隠忍するとも日本人たるの衿（矜）持を失ふなかれ  
諸氏は國の寶なり  
平時に処し猶ほ克く特攻精神を堅持し  
日本民族の福祉と世界人類の和平の為  
最善を盡せよ

海軍中将 大西瀧治郎